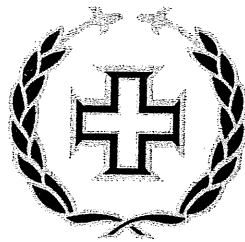


第63回聖マリア医学会

プログラム 抄 録 集



会 期 平成25年2月2日(土)
会 場 久留米医師会館
(久留米市櫛原町45)

聖 マ リ ア 医 学 会

主催：社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院
共催：学校法人聖マリア学院聖マリア学院大学

特別講演

第1会場：2月2日（土）

13：30～15：00

質的研究は科学的研究か？

東邦大学 看護学部 学部長・教授

高木 廣文

抄録：

人間を対象とする研究分野では、研究形態により量的研究と質的研究に分けることがある。質的研究の科学性を問題にする場合、まず質的研究とは本質的にどのような研究なのかを考える必要がある。それとともに、科学とは何かも明確にしておかなければならない。

現象の本質論から、私は自然事象（モノ）を研究対象とするのが「量的研究」、心的存在の中に生起する現象（コト）を扱うのが「質的研究」とであると区分している。

量的研究は、様々な現象を「測る」ことによりデータを収集するために、客観的であると考えられており、再現性も高いものとなる。

一方、心的存在である主観的な内部世界の現象に関しては、共通了解を得ることが極めて困難であり、本来的に対象者からの言語による情報などがなければ、研究事態が不可能なはずである。このように質的研究は、心的存在である内部世界の現象を解明するために行う研究であるといえる。すなわち、『質的研究とは研究対象者（情報提供者）のある主観的内的世界に関するテキストを、研究者が主観的に解釈し再構築する研究である』といえるだろう。

多くの人たちが考え違いをしているのだが、科学とは因果関係を客観的に明らかにすることを目的とするような営為ではない。基本的な科学哲学の考え方である Popper の反証主義や Kuhn の Paradigm 論などは科学理論を考える上で有用である。しかし、私は構造主義科学論の立場から質的研究の科学性を考えている。すなわち、『科学とは同一性（構造や形式）の追求であり、科学理論（モデル）の善し悪しは、目的とする現象をいかに上手に説明できるかによる』というのが私の立場である。このように科学というものを捉えると、特定の現象を説明するために構造、理論、モデル、システムなどを仮定して行う研究は、量的か質的かを問わず科学的な研究と考えられる。ただし、現象説明が上手いかなければ、他のよりよい理論に変更されることになる。

最後に、質的研究で最も批判が集中する主観的と思われるテキスト解釈の問題についても、最近の言語学の考えを踏まえ、構造主義言語論的なアプローチからその妥当性について考察する。

略歴：

昭和 49 年 3 月 東京大学医学部保健学科卒業
昭和 51 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科保健学専攻修士課程修了（保健学修士）
昭和 54 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程修了（保健学博士）
昭和 54 年 7 月～55 年 6 月 米国 NIH Visiting Fellow（米国環境保健研究所研究員）
昭和 57 年 4 月～平成元年 7 月 聖路加看護大学助教授
平成元年 8 月～11 年 3 月 文部省（当時）統計数理研究所助教授
平成 11 年 4 月～18 年 3 月 新潟大学医学部保健学科教授
平成 18 年 4 月 東邦大学医学部看護学科国際保健看護学研究室教授
平成 21 年 4 月 東邦大学医学部看護学科長
平成 23 年 4 月 東邦大学看護学部長

学会等：

日本学術会議連携会員
日本看護科学学会理事
日本民族衛生学会幹事
日本国際保健医療学会代議員
公益財団法人生存科学研究所専務理事